

高齢期におけるボランティア参加と職歴についての検討

—SSM2015 調査データを用いた分析—

滋賀大学 伊達平和

1. 目的

高齢社会の最先端をいく我が国において、高齢者のボランティア参加は生きがいの構築や精神的／肉体的健康を育むものとして注目されている。一方、ボランティア参加の規定要因は、幅広い年齢を含んだ分析がなされてきたが（三谷 2016）、高齢者に限定した分析や性による要因の差の検討は乏しく、実践的な問題関心に対して研究の余地は大きく残されている。

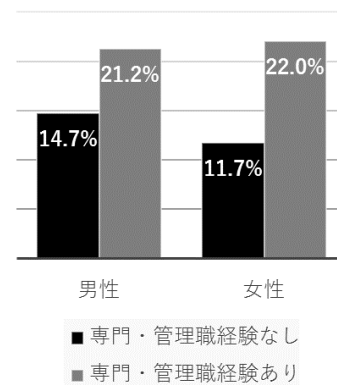
今回高齢者のボランティア参加を分析する視点として着目するのは、Spillover 仮説（Marshall and Taniguchi 2011）である。この仮説は現職において高権力・高技能の職業に就いている人ほど、ボランティアに参加することと予測する。しかし、高齢者のボランティア参加の分析においては、現職についている人が少なく、職歴も考慮する必要がある。よって本発表では高齢者における職歴、特に専門・管理職経験とボランティア参加の関連について検討する。

2. 方法

使用するデータはSSM2015であり、65歳から80歳の回答者を用いる（男性1101名、女性1193名）。従属変数はボランティア参加の有無とし、独立変数は専門・管理職経験ダミー変数である。分析は性ごとに行い、職歴とボランティア参加の関連の性差にも着目する。

3. 結果

クロス表による分析の結果（右図）から、男女とも専門・管理職経験をしていると、そうでない人に比べて有意にボランティアに参加していた。しかし、統制変数を加えた二項ロジスティック回帰分析の結果によると、高齢者女性のみ、専門・管理職経験が有意に関連しているという結果が得られた。



4. 結論

分析の結果より女性の専門・管理職経験者がボランティアに参加しやすいことが示された。当日は地域社会における高齢者ボランティアのリクルートへの応用可能性についても議論を行う。

文献

Marshall and Taniguchi, 2011, "Good Jobs, Good Deeds: The Gender-Specific Influences of Job Characteristics on Volunteering," *Voluntas*, 23: 213-35.

三谷はるよ, 2016, 『ボランティアを生みだすもの—利他の計量社会学』, 有斐閣.

付記

本研究はJSPS 科研費特別推進研究事業（課題番号 25000001）に伴う成果の一つであり、本データ使用にあたっては2015年SSM調査データ管理委員会の許可を得た。